『野営の心得―Babel―』

古宮　九時

「は？　外で寝泊まり？　何故そんなことをする」
「山だからですかね……」
主君である、キスク王妹オルティアの呆れた言葉に、雫は冷静に返す。
多忙極まる日々の中の、ほんの休み時間、オルティアのためにお茶を淹れた雫は、「ファルサスに来るまで何をしていたのだ？」と聞かれて旅の道程を話したのだ。
現代日本出身の雫は、この世界に来るまでアウトドアに縁のない暮らしをしていた。だが来てしまった以上、環境に文句は言えない。生きていられるだけ幸運だ。だから砂漠も横断するし、山も登るし、野営をしたりもする。汚れるし疲れるが、特に不平は感じない。当然のことだと思うからだ。
ただ宮廷で生まれ育ったオルティアには、山で布にくるまって寝る、ということ自体理解できないのだろう。雫の説明を聞いて更に食い下がって来た。
「何故山に登る？　追われたりしたのか？」
「国境線が山だったので、経路上の登山です」
「転移陣を使えばよい」
「戦争の影響で一帯が使用禁止になったんですよ」
雫がそう言うと、オルティアは一瞬眉を寄せて「ああ、あれか」と思い至ったらしい。雫は姫の、白魚のような指を眺めた。
「姫が外で寝泊まりしてみたいならお手伝いしますよ。城の庭でキャンプしましょうキャンプ」
「なんだか分からぬが不要だ」
「ひょっとして姫、虫とか蛇とか見たことないんじゃないですか」
「不要だと言っているだろうが！」
まだ「虫や蛇を獲ってこよう」と言っていないのに怒られた。こういう時は引き下がるに限る。雫は口を噤んで、主君のカップにお茶を注ぎ足した。機を見計らって切り出す。
「蛇と言えば、カンデラの城で禁呪の大蛇に追いかけられました。さすがに怖かったです」
「禁呪の大蛇？　そんなことになっていたのか」
「死体を吸って大きくなるんですよ。しかも物理攻撃が効かなくて」
この世界に来てから、死を覚悟したことは何度もあるが、視覚的に怖かったのはあの時が一番だったかもしれない。
オルティアは細い指を顎にかける。形のよい爪が、何もない空間を指した。
「遥か昔には、大規模禁呪によって逆転を狙おうとする国は後を絶たなかった。その威力は絶大で、それさえあれば戦争に勝てると思いこめるだけの力があったのだ」
「昔には、って今はないんですか？　禁止条約ができたとか？」
「禁止された時代もある。だがな、禁呪が用いられなくなった理由はもっと単純だ。――使われた国より、使った国の方が滅ぶことが圧倒的に多かった」
「え、どうしてですか……？」
「禁忌の力は制御しえないということだろう。例外はないと言ってもいいくらいだ。『禁呪を使いしものは禁呪に滅びる』という格言さえある。なのに、今のこの時代に禁呪を使おうとするなど、ただの馬鹿だな。歴史に学ぶ気がない愚か者だ」
「姫は勉強家ですもんね……」
宮廷の奥で惰眠をむさぼっているようなイメージがあるオルティアだが、彼女は政務家として勤勉だ。多くの書物に目を通し、学者を呼びつけて話をさせ、大陸の情勢について新たな情報をまめに仕入れている。
そんな姫からすると、禁呪に手をつけたカンデラは見えている地雷を踏んだようなものなのだろう。もっともらしく頷いてお茶を飲む主君を、雫は見つめた。
「勉強ついでに野営もしてみますか？」
「どうしてそうなる。話が繋がっておらぬわ」
「いつ何があるか分かりませんし、生死を分けることになるかもしれませんよ。異世界に放り出された時とか」
「お前と一緒にするな。妾ならとっくに死んでおるわ」
呆れたように言い捨てて、オルティアは雫が焼いてきた菓子をつまむ。それは絵画の一風景のように美しく、彼女がこの先一生、泥にまみれて苦労をする日が来なければいいと思ってしまう。人には適材適所があるのだ。
「もしもの時は、私が姫を守りますからね」
「どうした急に。外には行かぬぞ」
「虫がご覧になりたくなったら持ってきます」
「要らぬわ！」
雫は主君が投げてくる扇を受け止める。
いつかはこの日を、懐かしく愛しいものとして思い出す日が来るのかもしれないと思いながら。